



SILVA IAPONICARUM 日林

FASC. XIX • 第十九号

SPRING • 春

2009

Adam Mickiewicz University
Chair of Oriental Studies, Department of Japanese Studies

Jagiellonian University
Institute of Oriental Philology, Department of Japanese and Chinese Studies

University of Warsaw
Faculty of Oriental Studies, Department of Japanese and Korean Studies

Posnaniae, Cracoviae, Varsoviae, Kuki MMIX

ISSN 1734-4328

FINANCIALLY SUPPORTED BY THE ADAM MICKIEWICZ UNIVERSITY CHAIR OF ORIENTAL STUDIES

Drodzy Czytelnicy.

Oto pierwszy regularny zeszyt *Silvy* wydany po eksperymentalnym zeszycie specjalnym.

Powracamy niniejszym do oryginalnej formuły kwartalnika, którego niniejszy zeszyt zawiera artykuł z dziedziny japońskiej literatury klasycznej oraz współczesny tekst z dziedziny językoznawstwa japońskiego dotyczący pragmatyki przeprosin.

Kolejny, dwudziesty już zeszyt *Silva Iaponicarum* 日林 ukaże się jako zeszyt letni.

Kolegium redakcyjne

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

Poznań-Kraków-Warszawa-Kuki, marzec 2009

Dear Readers,

This is the first regular fascicle of *Silva* issued after the experimental special edition.

We get back to the original formula of our quarterly with the current fascicle containing an article on classical Japanese literature and a contemporary Japanese linguistic text on pragmatics of apologies.

The next, twentieth fascicle of *Silva Iaponicarum* 日林 will be issued as summer fascicle.

The editorial board

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

Poznań-Cracow-Warsaw-Kuki, March 2009

読者のみなさまへ

本号は、臨時特別号に続く、*Silva* 通常版第一号です。

私たちは、本号から元の季刊誌のかたちに戻ります。今回の冊子には、日本古典文学の論文と、日本語言語学の分野から謝罪の語用論に関する現代的なテキストが掲載されています。

次の *Silva lapponicarum* 日林第二十号は夏号として刊行される予定です。

編集委員会

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

2009年3月 ポズナニ・クラクフ・ワルシャワ・久喜

***Silva Iaponicarum* 日林**

Kwartalnik japonsyczny / Quarterly on Japanology / 日本学季刊誌

ISSN 1734-4328

Kolegium redakcyjne / Editorial board / 編集委員会

Redaktor naczelny / Editor in chief / 編集長

Dr. Arkadiusz Jabłoński, Adam Mickiewicz University,

Dr. Beata Bochorodycz, Adam Mickiewicz University,

Dr. Maciej Kanert, Adam Mickiewicz University,

Dr. Iwona Kordzińska-Nawrocka, University of Warsaw,

Dr. Stanisław Meyer, Jagiellonian University,

Dr. Kōichi Kuyama,

Ms. Anna Zalewska, University of Warsaw.

Rada naukowa / Research council / 研究顧問会

Prof. Romuald Huszcza, University of Warsaw, Jagiellonian University,

Prof. Agnieszka Kozyra, University of Warsaw,

Prof. Alfred F. Majewicz, Adam Mickiewicz University,

Prof. Mikołaj Melanowicz, University of Warsaw,

Prof. Ewa Pałasz-Rutkowska, University of Warsaw,

Prof. Eстера Żeromska, Adam Mickiewicz University.

Silva Iaponicarum
Uniwersytet im. Adama Mickiewicza
Katedra Orientalistyki, Zakład Japonistyki
ul. 28 Czerwca 1956 nr 198
61-485 Poznań, Poland
E-mail: silvajp@amu.edu.pl
www.silvajp.amu.edu.pl

SILVA IAPONICARUM IS PUBLISHED WITH THE FINANCIAL SUPPORT OF
THE ADAM MICKIEWICZ UNIVERSITY CHAIR OF ORIENTAL STUDIES

SPIS TREŚCI / CONTENTS / 目次

| | |
|--|----|
| アダム・ベドゥナルチク 「絵づくの貝おほひ」から絵合へ 一天福元年頃、後堀河院と薬壁門院主催の 催し物をめぐって— | 11 |
| Arkadiusz Jabłoński How Procedures Work – An Example from Japanese | 31 |
| STRESZCZENIA / SUMMARIES / 要約 | 46 |
| AUTORZY / CONTRIBUTORS / 投稿者 | 49 |
| PRACE NADSYŁANE / FOR CONTRIBUTORS / 投稿 | 52 |

「繪づくの貝おほひ」から繪合へ —天福元年頃、後堀河院と藻壁門院主催の催し物をめぐって—

はじめに

平安中期以後、貴族の間に流行っていた様々な物合の一種として繪合と呼ばれる遊戯が行われていた。繪合とは、左方右方に分かれ、出品された絵画の技巧・図案などの優劣を判定した催し物を指す。文芸作品におけるその最古例は『源氏物語』繪合巻に描かれているが、史実としては永承五年に開催された前麗景殿女御歌繪合であった。平安朝頃の繪合の折、特に草紙所収の絵は勝負の対象となったが、鎌倉時代初めからは、繪巻が絵画のなかで最も高く評価された。数多くのモチーフを題材とした繪巻は天福元年において後堀河院が藻壁門院と共に主催した繪合にも陳列されていた。しかし、この行事はそれ以前に開催されていた繪合と異なり、最初に「繪づくの貝おほひ」という催しが行なわれたのを特色とするが、その経緯、出陳された絵画の量などから、大規模な繪合として催されていたと考えられる。本稿は、その後堀河上皇の御所で開催された興味深い催し物に付随した繪巻の制作、享受などの様子を明らかにすることである。

一、「繪づくの貝覆ひ事」と繪合

後堀河院の方と藻壁門院の方との勝負に出品された様々な繪巻についての伝承は、建長六年成立の『古今著聞集』巻第十一、画図第一六（四〇三話）「後堀河院の御時繪づくの貝おほひの事」に以下のようによ説話化されている。

後堀河院御位すべらせ給て、内大臣の冷泉富小路亭にわたらせ給けるに、天福元年の春の比、院・藻壁門院、方をわかちて、繪づくの貝おほひありけり。大殿・攝政殿、女院の御方にぞをはしましける。一方に、しかるべき女房達四五人ばかりにて、ひろきには及ざりけり。先女院の御方負させ給て、源氏繪十卷たみたる料紙に書て、色／＼の色紙に詞はかゝられたりけり。能書のきこえある人々ぞかゝれたる、からの唐櫃になん入られたりける。御妬に、院御方御

負ありて、小衣の繪八卷、又さま／＼の物語まぜて四季に書て、一月を一巻に、十二巻にせられたりけり。料紙・こと葉、源氏の繪のごとし。そのほか雜繪廿餘卷あたらしくかき出して、おなじから櫃合に入られたりけり。あはせて三合也。又風流の繪など。小衣の繪に入てくわへられたりけるとかや。御負わざの日になりて、殿たち、女院の御方に參給て、責申されければ、ふるき繪のいま／＼しげにやぶれたるを二三巻、近習の殿上人の子童なりけるして、被し進たりければ、様々にきらひ申されて、いと興ありけり。其後祕藏の繪どもは出されけり。兩方の御繪ども姫方へまいらせられけるが、失させおはしましてのち、四條院へまいりたりけり。其後内侍督へぞまいりける。今はいづくにか侍らん。時代いくほどもへだゝり侍らねども、御ぬしはおほくかはらせ給ぬ。はかなき筆のすさみなれども、繪はのこりてこそ侍らめ。あはれなる事なり。¹

「絵づく」の語義は不明であるが、遊びや勝負に賭ける物として絵を出すことであったと考えられている²。しかし、この冒頭の絵づくの貝覆というのは一枚一枚の貝の裏に、美しい絵を描いた出貝を使った貝合（貝覆）という遊戯だけではない。説話の文面によると、天福元年の春頃、後堀河上皇と藻壁門院は左右二手に分かれ、貝合を競った。最初は「女院の御方負させ給」うが、二回目は「御妬に、院御方御負」があったので、ここで勝負が終ったのであろう。「絵づく」の語義に従えば、このような遊戯には必ず負け態が伴い、酒肴を整えて馳走を振舞うこと或は建暦二年十一月八日の三代將軍源実朝主催の絵合のように勝った方に「所課」を献上などすることもあった。冷泉富小路亭に行われた行事では、その代わりに数多く絵巻が出陳された。しかも、歌合や文字合等の際に絵画を賭物とした遊戯は鎌倉時代に稀な事ではなかったようで、特に花園上皇の治世時に頻繁に見られるが³、後堀河上皇と藻壁門院との間で主催され

¹ 『古今著聞集』、日本古典文学大系 84、岩波書店、1966、pp. 320-321。

² 『古今著聞集』所収の四〇三逸話に関する先行研究において、「絵づく」という言葉は貞丈の解釈に従って説明されている。伊勢貞丈『貞丈雑記』、故實叢書 1 卷、改訂増補、1993、p. 274（調度之部）を参看。

³ 文保三年正月十五日「先有文字合、以繪爲賭物、女房男等相分左右勝負、左方勝了」、同廿六日「今日有哥合、分左右、以繪爲賭物、左方勝了」、元應二年四月十九日「中宮

た際には、勝方を供応したことでは済まず、双方が絵画を制作しつづけ、その優劣を競う例の絵合に一転したのである⁴。

ところで、「貝おほひ」が開催されたのは天福元年（貞永二年）

「春の比」であるが、絵合は夏頃までに続いていたのであろう。貝覆の戯は一日に限られた行事として行われたそうであるが、正確な時期しか推測できない。つまり、後堀河上皇は貞永元年十月四日に譲位した十日間後、内大臣西園寺実氏の冷泉富小路亭に遷幸した。貝覆は、「天福元年の春の比、院・藻壁門院、方をわかちて、繪づくの貝おほひありけり」に従えば、確かに改元以前に行われるべきであり、また『明月記』三月十八日の条に「金吾服薬之間在此宅、物語繪月次事評定、闕月々旦求出之間、及曉鐘不寢歸廬」と三月二十日の条に「日来撰出物語月次」とあることによると、三月十八日以前に催されたのであろうと考えられている⁵。

小松によれば、この貝覆は恐らく二歳の皇女一宮暉子内親王を楽しませるために開催されたのであろう⁶。しかし、暉子内親王はまだ幼すぎたので、他の二つの想定される目的の方が、本行事の行われたるきっかけであったかもしれない。天福元年九月中旬頃、藻壁門院の容体は一進一退を繰り返し、遂に十八日に皇子を死生した後崩御したのである。滝沢が主張しているよう、生み月が来月（即ち十月）だった筈と考えられているので⁷、貞永二年の春頃、上皇と中宮は次の皇子が誕生してくることを知っていたと思われる。その結果、吉報を祝うために優雅な行事を開催する計画が現れてきたと考える。同様に祝賀する価値があった好機として中宮嬪子に院号を授ける儀式があったのであろう。貞永元年十二月、後堀河天皇の譲位後、四条天皇が即位したので、国母となった嬪子に対して迅速な院号の授与式が期待できていた。貝覆の行事は院号の授与式に伴ったイベントであったと思われる⁸。

大夫參雜談之間、圍基、朕勝了、…朕與中宮大夫勝負、以繪爲賭物、朕勝了」の条を参照。『花園天皇宸記』、一卷、増補史料大成33、内外書籍株式会、1938。

⁴ 小松茂美「〈古備大臣入唐絵巻〉考証」『古備大臣入唐絵巻』、日本絵巻大成3、小松茂美編、中央公論社、1977、pp. 104-105。

⁵ 寺本直彦『源氏物語受容史論考』、風間書房、1970、p. 744。

⁶ 小松、前掲書、p. 105。

⁷ 滝沢優子「『明月記』藻壁門院崩御記事が示すもの」『同志社国文学』、62号、2005、p. 96。

⁸ 寺本が「なお「貝おほひ」にせよ物語絵にせよ、本来女性のためのものであったと思われるから、その意味ではもの催しの形式上の中心は藻壁門院であったともいえる」と述

三月上旬頃に催行されたと考えられる「繪づくの貝おほひ」という催し物の際、絵巻は催しの懸賞品として用いられた。しかし、貝覆が終わった後、豪華な絵画自体が競争の対象となってきた。この絵巻は、恐らく二人目の皇子の幸運な降誕の希望を抱いて、寺本によると、「讓位されたとはいえ、まだ年若き後堀河院・藻壁門院のために、門院の父方九条家と母方西園寺家と、当時の二大権勢家の勢威を背景にし、定家以下御子左家一門の芸術的権威を動員し、さらに土御門家一族や後堀河院実兄尊性法親王らの協力を仰ぎ、一般の能書の人々に依頼するなど、いわば当時の政界・財界・芸術界の最高勢力を結集して」⁹制作されたものである。

二、優雅な陳列品—物語絵

「貝おほひ」の時、まず「女院の御方負させ給て、源氏繪十卷たみたる料紙に書て、色々の色紙に詞はかゝれたりけり。能書のきこえある人々ぞかゝれたる、からの唐櫃」に入れられた。この「源氏〔物語〕繪」の十巻は貝覆の開始以前に制作され、『明月記』貞永二年三月廿日の条に、

日來撰出物語月次、十二月各五所、不入源氏并狭衣、於歌者抜群、他事雖不可然、源氏當時中宮被新圖、狭衣又院御方別被書、…源氏繪詞内府被書、一昨日二三卷書出被送、手跡尤宜歟、飯室固辭云々、尤可然事也、大殿被仰手振由、不令書給、頻被申宜秋門院、老眼不可叶之由被仰云々、此繪如聞者、可爲末代之珍歟¹⁰

とある。定家によると「源氏物語絵巻」は当時の中宮嬪子が新たに描いたものである。詞書は姪に当たる藻壁門院のために内府（内大臣西園寺実氏）が二、三巻を書いたもので、最も優れていたようである。その他、詞書を書くことを「固辭」したという飯室入道前大納言九条教家、女院の父大殿九条道家の「手振由」、また女院の大伯母に当たる宜秋門院（後鳥羽后、道家の叔母任子）が「老眼不可叶之由」、詞書の執筆が難航して成し遂げられなかった。

「御妬に」上皇の方が負けた後、「料紙・こと葉、源氏の繪」の如くであった「小衣の繪八巻、又さまざまの物語まぜて四季に書て、

べていることよれば、筆者と同様の見解であるものと思われる。寺本、前掲書、p. 762。

⁹ 同書、p. 782。

¹⁰ 『明月記』第三、國書刊行会、1911、p. 341。

一月を一巻に、十二巻」を制作した。この「狭衣物語絵巻」については上に引用した廿日の条に「狭衣又院御方別」に書かれたものであり¹¹、貝覆の時、院の方に出品された唯一の絵巻であったと思われる。「さまざまの物語まぜて四季に書」いた絵巻、「そのほか雑繪廿餘巻あたらしくかき出して、おなじから櫃合に入られたりけり。あはせて三合也。又風流の繪など」はその後に詠えられた。

「さまざまの物語まぜて四季に書」いた絵巻は『明月記』三月十八日の条「金吾服薬之間在此宅、物語繪月次事評定、闕月々旦求出之間、及曉鐘不寢歸廬、」に従えば、定家が金吾（為家）と物語に描かれた月次事の題を選出した。また、十九日に「未時許左京權來談、又依繪事、參大殿之次云々」とあるように、定家の甥、左京権大夫藤原信実に当たる左京権はこの物語絵の事に関して大殿道家から何かの指令を受け、定家のもとに来談したものと解される。なお、廿日の条によれば、「さまざまの物語」は正確に次の十物語であり、

此所撰、夜寢覺、御津濱松、心高東宮宣旨、左右袖濕、朝倉、御河爾開留、取替波也、末葉露、海人苜藻、玉藻爾遊、以十物語毎月五、金吾清書訖、又加一見返之、付繁茂進入云々、以取交爲興、¹²

これから毎月五箇所の絵に題目が藤原為家金吾によって書き上げられた清書を定家がまた一見し、その後に為家のもとに返された。為家は大夫判官平繁茂を遣わせ、御所に進入させたということが知られる。

ところが、建永元年頃（天福より大凡二十五年前）に定家が編纂したのは『百番歌合』とそれに継ぐ『後百番歌合』から成る『物語二百番歌合』¹³において物語中の和歌を番えた制作である。『百番歌合』は『源氏物語』の歌と『狭衣物語』の歌とを番え、『後百番歌合』は『源氏物語』に十種の物語を合せたものである。定家が絵画化を目標として撰した十物語を、『後百番歌合』の中の十物語と比

¹¹ 田中によると、「貞永天福は相隣した年号で等しく四條天皇の時であり、明月院の記載と古今著聞集の記事とを直ちに結びつけることも出来ないが、或は明月記に見える狭衣物語も後堀河院の書かせられたものと想像されなくもない」とある。田中一松「狭衣物語絵巻」解説『日本絵巻物集成』5、雄山閣、1937、p. 10。

¹² 『明月記』、前掲書、p. 341。

¹³ 同様に諸物語中の和歌だけを編んだのは文永八年から選集『風葉和歌集』が挙げられる。

較すると、「露之宿」の代わりに「玉藻爾遊」が加わっただけであるが、この事実を拠れば、定家は『物語二百番歌合』のために撰んだ物語を踏襲し、それらから十二月の月毎に相応しい画材を撰んだのであろう¹⁴。また、その物語月次絵の画材も、『物語二百番歌合』所収の和歌に関連した可能性がある¹⁵。

定家が描くために物語月次の画材を選出した後、その絵巻の制作は約三ヶ月を要したと考えられる。『明月記』の六月十八日の条に次のように記述されている。

天晴、金吾來、爲繼朝臣來、典侍片時送御所新畫圖、令悦
目即返上、諸物語相交、月次繪十二卷、當時能書之人々書詞、座主親王、前内府、九條大納言、行能朝臣、清範入道、
月出之後清明、今夜暑熱聊宜、¹⁶

これによれば、定家の邸に、彼の嫡西園寺実宗公女の長女、後鳥羽院、安嘉門院にも仕えた後堀河院民部卿典侍因子から短期間に上皇の御所の新作絵巻が送られて来た。この「御所新畫圖」は「當時能書之人々」即ち座主法親王、前内府通光、九條大納言基家、行能朝臣、清範入道の五人が詞書を書いた「諸物語相交、月次繪十二卷」であった。六十図¹⁷の眼福は、定家にとって、目の保養になったが、「金吾來、爲繼朝臣來」と記されていることから考えると、この二人が偶々来て出合わず、新図の進呈を知って定家と共に通覧させて頂いて悦んだのであろう。一覧の直後、返上されたが、「新畫圖」が前もって御所に提出されたことは考え難い。何故なら、その頃、物語月次絵が既に出来上がっていたが、その詞書は五人によって書かれ、皆が能筆に長じた尊性法親王と同じように詞書が書けたのではあるまい。後高倉院の第一皇子で、後堀河院の同母兄である尊性が著した『真經寺文書』(山城眞經寺所藏 法華經裏文書)において「人々御中」（後堀河

¹⁴ 田村悦子「蜻蛉日記絵の詞書断簡について」『美術研究』、241巻、1965、p. 45。また、寺本、前掲書、p. 759。

¹⁵ なお、田村によると、「この天福の物語月次絵一定家の選出した月次絵一は、単に季節の折々風物や人事を描いただけのものではなく、必ずやその詞書は歌を含む段でなくならなかったと考えられる。特に歌道を専門とする定家が選んだ月次絵…であってみれば、和歌が重要な要素・契機となったであろうことは想像に難しくない」とされる。田村、前掲書、p. 44。

¹⁶ 『明月記』、前掲書、p. 367。

¹⁷ 寺本の計算による。前掲書、p. 752。

院御所の人々)に宛てた九通の書状¹⁸の一つ、六月廿一日書状に、尊性が数日間の籠居や絵の眼福握翫の事等について述べて、「御繪握翫之間、數日中籠候之條、其恐不少候、此内聊不審事候、注一昏進候、承置候之趣に聊相違之間、爲御尋注申候、…此等之趣可申入給、尊性敬言上」¹⁹と記した。「數日中籠」って「恐不少候」ということによって、六月廿一日以前、尊性が数多くの貴重な絵巻を一見したと思われる。「此内聊不審」な点のため、その事に関して「人々御中」に「注一昏進」めた。更に、前々承っていた趣旨と「聊相違」するので、「爲御尋注申」させたのに従って、十八日に定家の邸に到来した「御所新畫圖」を一覧した三人はおそらく或る間違いを見出して、尊性にその「聊相違」について尋ねたのであろう。そうであるならば、物語月次絵の全集は、上皇御方の御所において六月末に出品されたと考えられる。

三、日記絵と月次絵

その他、「雜繪廿餘卷あたらしくかき出して、おなじから櫃合に入られたりけり。あはせて三合」とある。「雜繪」の中には、『明月記』三月廿日の条を見れば、

又蜻蛉日記十所許撰出、同送金吾許、紫日記、更級日記、
中宮大夫書進之、自承明門院被撰其所、己書出進入了云々、其外蜻蛉所殘歟、仍令書出之、近日此畫圖
又世間之經營歟、更級黑畫、隆信朝臣娘右京大夫尼即書
之、殷富門院號姫宮之人、被書詞云々、爲能書²⁰云々、

とある。定家は『蜻蛉日記』だけから十箇所ばかり撰出して、金吾為家に送った。これは定家が金吾に清書することを求めたためと思われる。また、『紫式部日記』と『更級日記』は、承明門院（内大臣通親女源在子）がその十箇所を選出し、中宮大夫源通方が書き出して進上した。「更級日記絵巻」は、寺本や小松によれば、主として藤原隆信朝臣の娘である承明門院出仕の左京大夫尼が描き、後白河院第一皇女殷富門院亮子の御所の姫宮と呼ばれる者が詞書を書いた『更級日記』の墨絵（白描画か）と同じの作品であると見なされ

¹⁸ 寺本は五月以前からの書状を勘定に入れず、省いたが、絵合の初期状態を知るのに重要な文書となると考えられる。

¹⁹ 『真經寺文書』、大日本史料、第五編之八、p. 725。

²⁰ 『明月記』、前掲書、p. 341

ている²¹。『更級日記』については、翌日の二十一日の条にも窺え、「昨日物語之抄出、己以進入、付繁茂、事體尤叶御意之由、有内々御氣色云々、極以忝、…未時許典侍密々送更級日記新圖、即返上」とあるのによると、当日に民部卿典侍因子は密々に『更級日記』の新図を定家のみ送到して一覽させたのである。

三月二十日に定家が物語月次の画材を選出した後、尊性法親王はその一部の詞書などを書くように依頼されたと思われる。五月一日書状に、

内府今日令參候歟、此事等被仰合候歟、違日來之趣候者、尤可承存候…抑御繪加一見返進上候、此物躰、言語道斷覺候、握翫之餘兩日申籠候之條恐入候、先後躰まめやかに不適覺候、不甘心之由、氣色比興覺候、尤道理に候ける、長倫状け内府か計、何様にか申候へとも、委く何可被仰下候之趣、可令洩申給、尊性敬言上²²

云々とある。従って、尊性は新作の「御繪」を一見し、二日ほど恐れ入って籠もり、この「御繪」を握翫していた。その絵の態様は、法親王が注目したように、「言語道斷」「まめやかに不適」「不甘心」のため、「氣色比興覺候、尤道理に候ける」のであろう。この「御繪」は上記の「内府」、即ち内大臣西園寺実氏が尊性に携えてきたかのも知れないが、「此事等被仰合候」という記述が見られる。尊性が「御繪」を一覽したのは四月下旬頃、若干の絵が既にある程度できていたことを示すが、この「御繪」は「内府」実氏の詞書二、三卷に付加された「源氏繪」であったとする寺本の見解²³は少し撞着している。つまり、「源氏當時中宮被新圖」が三月十八日以前開催の行事に陳列されたので、当時詞書も既に作成されていたと考えられる。そのため、諸物語月次繪事で多忙を極めた法親王は四月末頃「源氏繪」を享受できたというのは疑わしい。

²¹ 寺本、前掲書、pp. 745-746、小松、前掲書、p. 106。しかし、萩谷の意見では、別の絵巻であり、「Eロ『更級日記繪』」と「F『更級墨繪』」と見分けられ称されている。萩谷朴「『紫式部日記』の古筆切と写本」『古筆と写経』、小松茂美編その他者、古筆学叢林3、八木書店、1991、pp. 177、183等。

²² 『真經寺文書』、前掲書、p. 723。

²³ 寺本、前掲書、p. 770。

五月一日書状に尊性法親王が見た「御絵」は「院御方…さまさまの物語まぜて四季に書て、一月を一巻に、十二巻」の一部に関係があるかもしれないが、同廿九日書状には、

御料帑給候畢、早染筆可進入候、假名殊荒蕪不可説候歟、御繪大旨沙汰出候、松浦物語三个度書改候間、今朝始書出候、詞遅々候與、自餘は大旨出來候、詞を忝候て、隨其躰忝可進入候、以此等之趣、可然可令進入給、尊性敬言上²⁴

と、再び「御絵」という言葉が出現している。尊性は、「御料帑給候畢、早染筆進入」すべきであったが、「御繪大旨沙汰出候」と述べている。問題となったのは「松浦物語」で、それを「三个度書改」めることが必要となった。この「書改」の理由は「松浦御繪…綵色不思様」²⁵であった。「松浦物語」の「御繪」は三度書き改めた為、また「詞遅々」としていたので、廿九日朝から詞を「始書出」したのであろう。しかし、「大旨沙汰出」した「御繪」及び「松浦物語」に加えて、「大旨出來」の作品は「詞を忝候て、隨其躰忝可進入候、以此等之趣」のあるものも窺える。その絵巻については、尊性がもう一通の五月廿九日書状に、

御繪詞書進上候、假名殊不堪候之間、頗見苦物候歟、抑青候御料帑枚數少候て、書合候はんと、文字を運て候程にこまやかに見候て、殘の詞躰にいとと不似候、惡かるへくは賜料帑、件字許欲書改候之趣、可然之様、可令披露給、尊性敬言上²⁶

と記した。廿九日両書状においては、「御繪…沙汰出」「御繪詞書進上」とあるのを踏まえると、五月中、尊性は様々な絵巻の詞書、または自ら絵を書いていたようである。しかも、両者詞書の「假名殊荒蕪」「假名殊不堪」から判断すると、詞は「不可説」「頗見苦物候」のであろう。そうであるならば、法親王は他人が書いた詞書を清書したということをもはっきりと示している。なお、「御繪詞」が進上されたが、「青候御料帑枚數」の不足で、「文字を運て

²⁴ 『真經寺文書』、前掲書、p. 724。

²⁵ 六月五日書状を参照。

²⁶ 『真經寺文書』、前掲書、p. 724。

候」のため、「殘の詞躰にいと不似候」ので、尊性は、「悪かるへくは」、「件字許」を「書改」めることを欲したのであろう。一週間後、六月五日書状に、上に引用した「松浦御繪」の他、また別の絵について述べている。

御繪七卷且令調進候、松浦御繪、三箇度雖書改、綵色不思議、仍退可直進之由相存候、安養尼繪竅狭少候之間、書續圖候、聊遲々事候、難叶今日御用候、此御繪も不如存、尤恐思給候、仰木宮手跡、尚様口候之、以令爲其詮候、但夫筆習候之間、御覽兼候歟、委く此旨令參啓候、此旨可令申入給、尊性敬言上²⁷

「御繪七卷」調進とは明らかではないが、少なくとも「松浦御繪」と「安養尼繪」とがその中に入っていたことは確かである。²⁸この「松浦御繪」は定家原作の『松浦宮物語』を絵画化したものを指す。²⁹また、横川の恵心僧都（源信）の姉妹であった安養（の）尼（君）の絵は当時人口に膾炙していた安養の尼物語を題材とした『今昔物語』巻第十二「尼願西所持法花経、持法花経、不焼給語第三十」³⁰の説話または『古今著聞集』巻第十二（偷盜第十九の四四六）の「恵心僧都の妹安養の尼盗人に逢ひて奇特の事」³¹を描いたものだと考えられている。³²六月五日書状を見ると、「安養尼繪」は極めて狭小であるため、尊性が「書續圖」即ち図を書き続けたのであろう。³³「此御繪」は「三箇度雖書改」められた「松浦御繪」

²⁷ 同書、pp. 724-725。<口>という記号は、不明な漢字を指す。以下の引用と同様。

²⁸ 寺本、前掲書、p. 771。その他、「狭衣物語絵」や「紫日記絵」または「更級日記絵」も勘定に入れられ、挙げられている。萩谷、前掲書、p. 191。

²⁹ この物語は正徹の『正徹物語』下巻「清巖茶話」所収の「松浦の物語」という草子と一致すると推測できるが、正徹は室町時代の僧であり、六月十日尊性書状には「合戦之所」とあるので、別個の作品、即ち定家の若い頃の『松浦宮物語』であると考えられている。萩谷、前掲書、pp. 191-192。

³⁰ 『今昔物語』三、新日本古典文学大系 35、岩波書店、1993、pp. 157-159。

³¹ 本説話についての註解によれば、安養の尼とは安養浄土（極楽浄土）を祈念して、安養寺に住んだ人がある。『古今著聞集』、前掲書、pp. 358-359を参照。

³² 寺本、前掲書、p. 746。

³³ 寺本は、「書續圖」とは詞を図柄の中に書き続けたことまたは詞を省いて図柄を連続させたのでと解している。同書、pp. 771-772。しかし、六月五日書状に「安養尼繪竅狭少候」と明白に既述され、また<書續詞候>ではなく「書續圖候」と見られるので、寺本の「書續圖」に関する不審は不要と考えられる。なお、「書續圖」というのは尊性法親王が「安養尼繪」をも書いた可能性を示す。

と同じく「不如」、叶わないと考えていた。「安養尼繪」の詞書は「木宮手跡」によって作成されたのであろうが³⁴、「木宮」という人物については不明である。

上述の「御繪七卷」を調進したことについては『明月記』にも既述されている。それによると、六月五日に未の時ばかりに藏人大輔経光が定家の邸を訪問したが、「先是巳時許淨照房來、金吾又來會、自春所聞院御方繪、月來所被新圖、今日可有御覽云々」³⁵とある。定家は、藏人頭または金吾為家によって³⁶、当日上皇が月来新たに描かれていた世評に高い御所の繪卷を御覽すべきであることを知った。その「院御方繪」の中には、上記のように、「松浦御繪」と「安養尼繪」両方、また『蜻蛉日記』『更級日記』等、六月初めに完成した繪卷が入っていたのであろう。

「御繪七卷」に加えて、尊性の六月十八日書状に述べられる不詳の繪も「雜繪」に含まれていたかもしれないが、尊性法親王は以下のように記録した。

御繪事、外題進上候、合戦之所以外大様候、長賀筆之抑二合分預候畢、心閑養眼可返進入候之由、可然之様可令洩奏聞給、³⁷

「御繪七卷」を献上した後、尊性は「外題」のものを進上した。寺本³⁸によれば、記述に現れる『松浦物語』所収の合戦の場面もしくは承安三年「陸奥守義家合戦繪」が制作されて以来、「将門合戦繪二十卷」等合戦繪卷の類であったと考えられている「合戦之所」以外は大体が出来上がって、宋画の新しい様式を取り入れた宅磨派の一人であった長賀³⁹が繪筆を採って、「抑二合分預」けられたものを言っていると推測できる。

³⁴ 寺本のように、尊性法親王が本繪卷の詞書を書いた。寺本、前掲書、p. 747。

³⁵ 『明月記』、前掲書、p. 363。

³⁶ 上文によると、定家の長男光家、淨照房も同時に現れて来たが、彼が繪卷の事に従事したのは考え難いと見做されている。寺本、前掲書、p. 749。

³⁷ 『真經寺文書』、前掲書、p. 725。

³⁸ 同書、p. 747。また、吉田によると、特に漢武の金日磾の反乱で、幼帝と母后が武士に守れつつ都を落ちる光景を描いた繪であつたと考えられる。吉田幸一『松浦宮物語伏見院本考』、古典聚英 6、古典文庫、1992、p. 540。

³⁹ 「長賀」という繪師については、寺本、萩谷とも不詳とされたが、美術史研究では既に論じられていた。久保田によると、『吉記』承安三年六月五日条（「法務僧正覺讚始入

しかも、上述のように、同じ頃法親王は仕上がった「御所新畫圖…諸物語相交月次繪」の「聊相違」についての助言を求められていたため、「数日間籠」もっていたが、廿一日附書状に、「退言上／今は御繪不候歟、此中盛兼卿進入繪、以外尋常見候、珍重之候」⁴⁰という追陳を見ると、数日間握翫した絵の他の「御繪」は持っていなかった。従二位権中納言藤原盛兼は「尋常見」える珍重の絵を上進したのであろうとしか記録されなかった。この「盛兼卿進入繪」とは中納言が自ら書いたもの（絵または詞）か否か、不明である。なお、『明月記』三月廿日の条に物語月次絵や日記絵等以外、定家が撰した物語月次絵の直接の先蹤と思われる式子内親王月次絵に関する記録が窺える。

典侍往年幼少之時、令參故齋院之時、所賜之月次繪二卷、
年來所持也 今度進入宮、詞同彼御筆也、垂露殊勝珍重之由、上皇
 有仰事云々、件繪被書十二人之歌、被宛正月、敏行云々、清少納言、齊信
所、但三月、天曆壺、四月、實方朝臣祭、五月、紫式部日記、六月、業平朝臣秋、七月、後冷泉院、八月、道信朝臣
無歌、三月、御製、使神館歌、四月、曉景氣、五月、風吹告雁、六月、御製、八月、虫聲、
和泉式部帥、九月、馬内侍、十月、宗貞少將未、十一月、二月、四條大納言、
宮印門、時雨、通女之姿、北山之景氣、 二卷繪也、表紙
青紗縛、水精、41
 軸
有繪、

定家の娘民部卿典侍因子は、幼少の頃（典侍七歳以前）、式子内親王から月次繪二巻を下賜されて「年來所持」していたが、「今度進入宮」した。その月次繪は宮⁴²が自ら描き、「詞同彼御筆」であったのだろう。各月次繪に十二人の歌が書き加えられたもので、以下のような歌とその場面であったと考えられている。

寺事」の折の「威儀師覺俊（惣在庁）、長賀」、ならびに『山槐記』治承三年十月十日条（「院宮、為御受戒令向東大寺給」の折の「次侍六人」の中に見出せる「維禪（于時総在庁）、長賀」）と治承四年三月二日条（「自今日例百塔」の際に「長賀大徳啓白於清水波羅密寺等者」）に見られる「長賀」は、久保田によると、身分の高い人物とは思われない。『泉涌寺不可棄法師傳』建久十年四月十八日の条、泉涌寺の開祖俊苧が二人の弟子（安秀と長賀）を連れ、渡宋した記述されている人物は絵師長賀と同一人物であったと考えられている。また、「長賀」は最初の落款を絵に施した人でもあったという。久保田孝夫（『松浦宮物語』と『真経寺文書』一絵師「長賀」の存在一）『大阪成蹊女子短期大学紀要』、35号、1998、pp. 16-21。

⁴⁰ 『真経寺文書』、前掲書、p. 726。

⁴¹ 『明月記』、前掲書、p. 341。

⁴² 寺本（p. 754）によると上記の宮は中宮嬪子であるが、小松（p. 106）のように一品宮暲子内親王を指すのである。

正月 「敏行云々」

元日一日、二条の後の宮にて、しろきおほうちきをたまはりて 藤原敏行朝臣ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりと驚かれぬる⁴³

二月 「清少納言、齊信卿、參梅壺之所、但無歌」

かへる年の二月廿日よ日、…局は、ひきもやあけ給はんと、心ときめきわづらはしければ、梅壺の東面、半葩あげて、「ここに」といへば、めでたくてぞあゆみ出て給へる。

櫻の直衣のいみじゅくはなばなど、裏のつやなど、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだりて、くれなゐの色、打ち目など、かがやくばかりぞ見ゆる。しろき、薄色など、下にあまたかさなり、せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとちかうよりみ給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひける、これにこそはとぞ見えたる。

御前の梅は、西はしろく、東は紅梅にて、すこし落ちがたになりたれど、なほをかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。⁴⁴

三月 「天曆壺御製」

天曆四年三月十日四日、藤壺にわたらせ給ひて、花をしませ給ひけるに 天曆御製円居してみれ共あかぬ藤浪のたゝまはくをしきけふもある哉⁴⁵

四月 「實方朝臣祭使神館歌」

まつりのつかひにて神だちの宿所より齋院の女房につかはしける 藤原実方朝臣千早振いつきの宮の旅寝にはあふひぞくさの枕なりける⁴⁶

五月 「紫式部日記暁景氣」⁴⁷

⁴³ 『後撰和歌集』巻第一、春上の一。または『敏行集』の一であろう。

⁴⁴ 長徳二年二月廿日過ぎ、頭の中將齊信が梅壺を訪れる場面である。『枕草子』、日本古典文学大系 19、岩波書店、1965、pp. 119-121。寺本が気付いたように、『枕草子』においては、歌はないが、「まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひける、これにこそはとぞ見えたる」とあるように、この場面自体が恰好の画材であったろう。寺本、前掲書、p. 755。

⁴⁵ 『新古今集』巻二、春歌下の九六〇。または『村上御集』の五か。

⁴⁶ 『千載集』巻十六、雑歌上九七〇、新日本古典文学大系 10、岩波書店、1993、p. 291

⁴⁷ 現存する『紫式部日記』においては「暁景氣」に相当する和歌がないが、寛弘六年某月十一日の暁の舟遊びの場面に関わると考えられる（寺本、p. 755）。『紫式部日記』に

土御門院にて、遣水のよなる渡殿の簀子にみて、高欄にをし
かゝりて見るに

影見ても憂きわが涙落ちき添ひてかごとがましき滝の音哉⁴⁸

六月 「業平朝臣秋風吹告雁」

むかし、おとこ有りけり。人のむすめのかしづく、いかでこの
おとこに物いはむと思けり。うち出でむことかたくやありけむ、
物病みになりて死ぬべき時に、「かくこそ思しか」といひける
を、親聞きつけて、泣く／＼告げたりければ、まどひ来たりけ
れど、死にければ、つれ／＼とこもりをりけり。時は六月の
つごもり、いと暑きころほひに、夜みは遊びをりて、夜ふけて、
やゝ涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。このおとこ見臥
せりて、

ゆく螢雲のうへまで去ぬべくは秋風ふくと雁に告げこせ⁴⁹

七月 「後冷泉院御製」

七月七日二条院の御方に渡らせたまひける

後冷泉院御製 逢事は棚機つめにかしつれど渡らまほ
しきかさゝぎの橋⁵⁰

八月 「道信朝臣虫聲」

ある山寺にて虫のこゑ／＼なくをきゝて
鳴き弱る虫のこゑ／＼きくときはちゞにもものこそかなしかり
けむ⁵¹

は「十一日の暁、御堂へわたらせ給ふ。御車には殿の上、人々は舟に乗りてさしわたり
けり。それには後れて、ようさり参る。教化おこなふ所、山・寺の作法うつして大懺悔
す。白い塔など、繪にかいて、興じあそび給ふ。上達部、多くはまかで給ひて、少しぞ
とまり給へる。後夜の御さうし教化ども、説相みな心々、二十人ながら、宮のかくてお
はします由を、こちかひきしなことはたえて笑はるゝ事もあまたあり。事はてて、殿上
人舟に乗りて、皆漕ぎつづきてあそぶ。御堂の東のつま、北向におしあけたる戸の前、
池に造りおろしたる橋の勾欄をおさへて、宮の太夫は居給へり」とある（『紫式部日
記』、日本古典文学大系 19、岩波書店、1957）。なお、萩谷によると、『紫式部集』の
一首を題材としたものと解されている。萩谷「『紫式部日記』の古筆切と写本」、前掲
書、p. 185。

⁴⁸ 『紫式部集』、新日本古典文学大系 24、岩波書店、1989、pp. 343-344。

⁴⁹ 『伊勢物語』四十五段、新日本古典文学大系 17、岩波書店、1997、p. 123。もしくは
『後撰和歌集』巻き第五、秋上の業平朝臣著の二五二を題材とした絵である。

⁵⁰ 『後拾遺集』巻十二、恋二 または、月次屏風絵に七夕の時、絵題として扱われている
点からすると、「冷泉院はじめてつくらせ給ひて水などせきいれたるを御覧じてよませ
給ひける<岩くぐる滝の白糸たえせでぞひさしく代々にへつゝ見るべき>」（『後拾遺
集』巻七、賀、後冷泉院御集）も画景として良いのであろう。

⁵¹ 『道信集』六四の歌の秋鳴く虫は道信父を亡くした喪失感と深く結びついたと考えられ

九月 「和泉式部帥宮叩門」

れいの童ばかりを御ともにておはしまして、門をたゝかせ給ふに、女目をさましてよろづ思ひつゞけふしたる程なりけり…女はねでやがて明かしつ。いみじう霧りたる空をながめつゝ明かくなりぬれば、このあかつきおきのほどのことどもをものに書きつくるほどにぞれいの御文ある。たゞかくぞ

〔宮〕秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな…

風のをと、木のはののこりあるまじげに吹きたる、つねよりも物あはれにおぼゆ。こと／＼しうかきくもるものから、たゞ氣色ばかり雨うちふるは、せん方なくあはれにおぼえて、

〔式部〕秋のうちはくちはてぬべしことわりのしぐれに誰が袖はからまし⁵²

十月 「馬内侍時雨」

十月ばかりまで来りける人の時雨し侍りければたゞずみ侍りけるに 馬内侍かき曇れ時雨るとならば神な月心そらなる人やとまと⁵³

十一月 「宗貞少將未通女之姿」

五節のまひひめをみてよめる

岑宗貞あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとちよをとめのすがたしばしとゞめん⁵⁴

十二月 「四條大納言北山之景氣」

歌や場面は不明である。

式子内親王の月次絵は、以上を見れば、様々な勅撰集所収の和歌とその詠歌の風情を題材とした場面に限らず、日記、随筆等から撰ばれた題材も利用された場面があったものと想像される。定家が物語月次絵の画題を撰出する際に、自ら流行の物語を求め、その中から

る。平田喜信『道信集注釈』、私歌集注釈叢刊 11、pp. 204-205。

⁵² 長保五年九月廿日余頃からの場面である。『和泉式部日記』、日本古典文学大系 20、岩波書店、1965、pp. 418-420。

⁵³ 『後拾遺和歌集』巻十六、雑二。また、『馬内侍集』には「十月ばかりにあからさまにきたる人のかへりなむとするに、しぐれのすこしすれば」とある。群書類従、第 15 輯、和歌部、巻第 272、塙保己一編、1960、p. 529 を参照。

⁵⁴ 『古今和歌集』巻十七、雑歌上の八七二、日本古典文学大系 8、岩波書店、1965、p. 277。陰暦十一月に行われる豊明節会で少女が舞を舞うという場面を描いた絵であったと考えられる。

四季十二ヶ月毎に折々の風物に因んだ情景の五箇所を撰した。中宮が描いた「源氏繪」十卷と院の御方が別に制作した「小衣の繪」八卷、そして定家が撰出した十物語、合計で十二物語は、小松に従えば、「いずれも当時のベストセラー」⁵⁵であった。しかし、定家は、既述のように約三十年前に『物語二百番歌合』のために撰んだ評価の良い物語を月次に配したことによって、直接式子内親王の月次絵に深い関心を示したと見なされている。⁵⁶また、定家が式子内親王月次絵に影響されたのは、小松が主張しているように、四月「實方朝臣祭使神館歌」という月次絵と関係がある。この四月の歌は賀茂祭の折葵を詠み入れた歌であった。重なり合う場面が「蜻蛉日記絵」の詞書断簡にも見られる。賀茂祭の時、一人の男と二人の女の間で芳しい橘の枝に掛けた「秀句」の遣り取りを描き出したものと思われる場面は、本来『蜻蛉日記』康保三年四月の賀茂祭の段にある作者道綱母と時姫とが上の句を応酬する場面と同様であろう⁵⁷。

四、蓮華王院宝蔵の什物

「雑繪」の他、院の方が陳列したのは「小衣の繪」に添えられた「又風流の繪など」であった。風流は意匠を凝らす事や風雅に関わっているが、この「風流の繪」がどのような絵であったかは明らかでない。

なお、『古今著聞集』に従えば、「御負わざの日になりて、殿たち、女院の御方に參給て、責申されければ、ふるき繪のいまいましげにやぶれたるを二三卷、近習の殿上人の子童なりけるして、被_レ進たりければ、様々にきらひ申されて、いと興」であったという。古画が出陳された後、「祕藏の繪どもは出され」た。『民経記』においては、後堀河上皇が右少弁藤原経光を遣して蓮華王院宝蔵の絵画を取り出させた事が窺える。天福元年五月廿一日および同廿二日の条に、

⁵⁵ 小松茂美「王朝絵巻の後白河院」『源氏物語絵巻、寝覚物語絵巻』、日本絵巻大成1、前掲書、p. 131。

⁵⁶ 定家と式子内親王との恋愛関係の有無についての説があるが、もし本当であったとすれば、定家のこの月次絵に関わる感心は当然であったと思われる。

⁵⁷ 田村、前掲書、p.40。加えて、田村は「恰も、この蜻蛉日記断簡の章句一段は、その作者道綱の母と相手の女との軽妙なやりとりの和歌を中心とした趣向のものであること、それは歌人定家が選んだとすることに矛盾しない。また、題材が年中行事の尤たる賀茂祭の場面であることは、物語月次絵にひきつづいてつくられて、おのずから月次絵的傾向に引かれていたと考えてよい」と述べている。同書、p. 45。

廿一日、…抑明日爲取出蓮花王院寶藏御繪、可參向寺門之由、自院被仰下、以女房奉書也、又大夫判官繁茂密々爲別御使相副可參之由、相触者也、予即下知寺家了、…

廿二日、…予如法午刻著束帶參蓮花王院、今朝平大夫判官繁茂送使云、只今可參寺門參蓮花王院寶藏取出御繪

、云々、是依別仰繁茂先々參寺門云々、兼□、予下知寺家了、又當寺辨日來爲經朝臣也、而大

別嘗會奉行之間、無其人之間、予可參之由昨日、蒙仰了、予自西面門參進、經三十三間御堂後北行、至北面東端開扉、

其間敷座、白襖、内々躰也、繁茂兼在之、相引可參寶藏也、繁茂給内々、目六、宸筆被注下云々、長櫃持夫事、寺家沙汰進云々、繁茂兼内々下知執行云々、而予不知子細、下知廳了、可止之由仰遣了、繁茂相共參北寶藏東端戸開之、寺家司等存知開之、先々寶藏弘庇敷辨座云々、而件弘庇顛倒云々、深草無路、唯綠蕪塞路許也、予入寶藏中、繁茂同入、年中行事繪四合、又繪櫃第六・第九櫃二合可被取出云々、即寺家可出之、入長櫃、御本御手箱内、千載集可取出云々、御本御手箱等自棚次第令取出、其銘云、甲一・乙一、如此被付之、予伺時代、乙六御手箱開之、假封開之伺見之處、千載集在之、俊成卿清書進本云々、其外堀川院百首・拾遺集并抄以下多被入之、殊勝寶物也、即此御手箱取出了、如本付假報、入長櫃了、長櫃二合入之、寺家兵士代官爲持夫云々、寶藏封予書之給了、繁茂又書報給了、繁茂猶祇候寶藏内、予退了、御繪内々可進入之由、相觸繁茂了、御倉繪并管絃樂器御櫃以下多以被置之、⁵⁸

とあるのに従えば、右少弁藤原経光が、また番頭役を務めている左衛門尉平繁茂が副使として上皇の仰せを受け、宝蔵に赴いた。その日、宝蔵から取出されたのは「年中行事繪」四合と、繪櫃二合（第六・第九櫃号）⁵⁹であったことが明らかになる。

⁵⁸ 『民経記』七、大日本古記録、岩波書店、1995、pp. 80、86-87。また、同書の暦記の同廿二日の条「天晴、入夜雨下、參蓮花王院、爲取出寶藏御繪也、平大夫判官繁茂爲御使相副、以寺長横沙汰渡了、」を参照（p. 12）。

⁵⁹ 第九櫃号については後述するが、第六櫃号には、小松の推測によると、「吉備大臣入

五月廿二日の経光と繁茂が宝蔵で検知したことは『真経寺文書』の三月廿二日附書状⁶⁰と接続すると考えられる。尊性法親王は以下のように

退言上

凡彼寶蔵等は、隨分寶物共、亂逆以後散々と被置て候ける、こまやかに繁茂等相向て、共口參可檢知と覺候也、且口參、此等之趣、可計申候也、此御櫝銘は下字は消候へとも、如法轉讀時御經と候けると覺候、然又無指事、御經許にてもや候覽、然當時聊かにつかなき躰して候之時に、事ありかけに注申入候、抑又彼御書等被納て候、家にも申入無口候覽、それも可被搜出候歟、⁶¹

と記述した。これによれば、後堀河院は、五月廿日に具体的な絵巻を取り出すように経光と繁茂を使わせる前、予め繁茂等に蓮華王院の内容を調べさせたのであろう。その検校についての詳細な報告は、つまり華王院の什宝が「亂逆以後散々」と置かれ、「御櫝銘は下字は消」され、乱雑を極まっていたそうであるのに基づいて、繁茂の他、尊性も同時に蓮華王院の宝蔵に赴き、後述のように、多数の絵巻を持ち出したと考えられている⁶²。

なお、上皇の方は陳列するための絵巻を蒐集して準備していた時、院が作成した絵画の目録に従ったのであろう。『民経記』廿二日の

唐絵巻」をはじめ、「火々出見尊絵巻」「伴大納言絵詞」が収納されていたかも知れない。小松、前掲書、p. 107。

⁶⁰ 大日本史料の註によると、三月廿二日附書状等は文暦元年（天福二年）二月の条に収められたが、天福元年五月二十二日の蓮華王院の絵画を取り出した事に関わる記録である。言い換えれば、蓮華王院に入った日（廿二日）が両方の場合には重なってくるので、文暦元年二月の条所収の三月廿日書状は、実際に五月の出来事を記録する（従って、尊性が日付で誤ってしまった可能性を示す）、或は事実即したことであると思える。しかし、『鎌倉遺文』によって見れば、同じの三月廿二日書状は貞永二年（天福元年）三月に収められている（『鎌倉遺文』、古文書編第七巻、竹内理二編、東京堂、1974、p.16）。なお、後堀河院と中宮嬪子が主催した絵合は既に三月初め頃に始まった事実を考慮すれば、法親王の書状日付で錯誤が見られず、また天台座主が最初から本行事で活躍していたことを明らかにするのである。

⁶¹ 『真経寺文書』、大日本史料、第五編之九、pp. 3-4。

⁶² 和田によると、「この御秘蔵の画を出されるに就いては、上皇が法親王に御相談になりました様であります。法親王は蓮華王院の宝蔵より、十二櫃第九櫃、第二櫃、六道御絵、西京賢女絵」を取らされたと考えている。和田英松「絵合に就いて（下）」『國華』、448号、国華社、1928、p. 92。

条に記録されたように、繁茂は内々取り出すべきである作品の宸筆で注記された「目六」を利用したと考えられる。絵巻の目録を所有したのについては三月十日書状に尊性法親王も述べている。法親王が記したように

抑御繪目六返進上候、此内十二横并第九横六道御繪、此等を暫可申出之由重思給候、可然之様可令奏進給、⁶³

とあって、目録の中に列挙されたのは「十二横」と「第九横六道御繪」であった。また、右近衛大将大炊御門家嗣（後堀河の乳母成子の婿）に宛てた三月廿二日附書状にて尊性は、

（實氏）
昨日進入候、法華堂相折帳申出候、可遣○中略、二月二十日ノ條ニ取ル、内府許候、兼又先度申入候、六道繪并第廿横と、西京（賢力）
、堅女繪横と可被申出候、明後日登山、廿五日可罷下候、委く下京以後可參入之由、可令洩申入給、
三月廿二日 尊性上
（家嗣）
進上 右 大將殿⁶⁴

と記録し、先頃に「六道繪并第廿横」と「西京堅女繪横」を申し入れられたが、「明後日登山」のため、廿五日に罷り下るべきであったのだろう。

「六道御繪」というのは、六道の世界を描いた浄土教の絵、即ち「餓鬼草紙」「地獄草紙」「病草紙」等を含む作群を指し示すものであろう⁶⁵。上記の尊性の三月頃と経光の五月廿二日の記述に従えば、第九号の絵櫃に収められていた。「西京堅女繪」⁶⁶は錯誤であ

⁶³『真経寺文書』、前掲書、p.3。和田は、「この貝覆を催されたのは、唯春とばかりありますが、これに関する尊性法親王の御消息に、三月十日付のものがありますから、二月の下旬より以前であろう」と述べている。和田、「絵合に就いて（下）」、前掲書、p.92。

⁶⁴ 同書、同頁。

⁶⁵ 小松、前掲書、p.106。

⁶⁶『鎌倉遺文』所収の三月廿二日書状においては「西京堅女」が見られる。『鎌倉遺文』、前掲書、p.15。

るかもしれないが、西京賢女絵と考えられている⁶⁷。既述された作品の他、上皇の目録には不明な「繪櫃第六」「十二櫃」「第廿櫃」も入っていたそうである。

絵合で陳列された「兩方の御繪ども」の全体または一部は「姫方へまいらせられけるが、失させおはしましてのち、四條院へまいりたりけり。其後内侍督へぞまいりける」とあるのによって、先ず「姫方」即ち一品宮暲子内親王（小松）もしくは暲子内親王（寺本）の所へ移された。暲子であったならば、その夭逝（嘉貞三年）後、「兩方の御繪ども」の収蔵所がまた二、三回ぐらい変更されていたのであろう。

おわりに

天福元年に催された絵合は、その歴史において特別の意味を持つものであった、と考えられる。『明月記』三月廿日の条に「近日此畫圖又世間之經營歟」とあるように、物語絵・日記絵・歌絵・説話等十数種類以上の多数の作品を作製することは諸所方々で競い合う流行の様相を呈していたのである⁶⁸。絵合を準ずべきである「繪づくの貝おほひ」のために賭物として集められて絵師に注文された絵巻は、それ自体が実際に勝負の対象となり、甚だ興味深い絵合に出されてきた。上皇と女院開催の絵合は当時これを享受していた有様の一端を如実に示す催し物であった。

⁶⁷『真經寺文書』、前掲書、p.3。「西京賢女」という言葉は曖昧で、平安の三人の賢女歌人であれば、清少納言・小野小町・紫式部であろう。また、五賢女と称された歌人、泉式部紫式部、赤染衛門、清少納言、伊勢大輔と並んで伝承なども残る。

⁶⁸ 寺本の研究によれば、本絵合に出された絵画の数が非常に多かったようである。この絵を数量的に考えると、例えば「源氏絵」は総計十巻百図近く、諸物語絵は十二巻六十図（各物語平均六図）、雑絵二十余巻は七十図以上となること等であったと推測できる。寺本、前掲書、pp. 751-753。

How Procedures Work - An Example from Japanese *

Into Communication

The shift of focus from a word or sentence unit to the phenomena of human communication is undoubtedly the most significant change in linguistics of the last century. Though particular approaches may differ, there seems to be no doubt that one of the most important – if not the most important – task of the discipline is “to achieve a scientific understanding of how people communicate” (Yngve 1975). For the accomplishment of this purpose it was necessary both to broaden the scope of linguistic study and to devise new notions compatible with the task.

Language is still the main area of linguistic research, but it is treated as a device of communication rather than an ultimate object of description. It is much less important to explain the rules of grammar and syntax than to understand how language is used to achieve speaker’s goals, which do not necessarily have to be directly related solely to linguistic behavior. For this purpose, within a description of a communication environment it is necessary to mention both the language used in the environment and competent speakers (and hearers) of the language. In their language activity the speakers (and hearers) deal not only with grammar rules and vocabulary, but also, if not first of all, with certain activity patterns essential to communicate in a predictable and effective manner.

Activity Patterns

Activity patterns are functional units of communication. They can be described as speech situations (Hymes 1974: 51), scripts, plans and goals (Shank, Abelson 1977) or schema (Mandler 1984). They can also be viewed as procedures functioning within a layered model of communication and validated by techniques of honorific modification (HM) (Jabłoński 2004).

In order to use certain activity patterns in a predictable and effective manner, the speaker/hearer should have both certain static and dynamic knowledge. The scope of what could be defined as a communicational competence *datum* is the knowledge of *what* situations may happen and *how* situations happen. The communicational *novum* is handled with the

* The paper was presented at the conference of Japan Studie Association in San Diego in January 2007.

ability to monitor the environment parameters and interpret/modify communication behavior.

An early notion related to the activity patterns is a concept of procedure devised by Austin (1962: 14). Procedures are tools for achieving goals. They are first of all sequential entities, but it should be noted that the execution of a procedure is related to a certain effect, on some level, according to Austin, conventional, and, on other levels, not necessarily conventional. There should also be ways to deal with unexpected events affecting procedures.

Procedures should fit the context, have a certain fixed content and fulfill certain technical conditions of validity. There are many kinds of procedures, not all valid in any environment. The labels of procedures cannot be reproduced among heterogeneous environments without a risk of misunderstanding, as Wierzbicka (1991) points out.

When a procedure cannot be continued, an infelicity emerges. Infelicity is defined by Austin as “one of the things that can be or go wrong (ibid.)” The most serious infelicities materialize when a procedure is not recognized as a procedure. There is no more ground to communicate in such situation. The procedure not recognized as a procedure turns to a meaningless, random set of actions which cannot be interpreted properly. This phenomenon may be related to the description of a sign by Milewski (2004: 8), who states that “A sign is above all different from [...] what is not a sign and does not refer our attention to anything.” In the face of an infelicity there is a risk that predictable situations become unpredictable and the flow of events gets out of control. This is not desirable.

Infelicities and Communication

There is no doubt that communication is not carried only on the level of words and sentences. There seems to be even less doubt that infelicities do emerge in everyday communication activity and that their reasons are countless. They may interrupt communication or make it impossible. Where infelicities exist, there must also be conventional ways of dealing with them, both in a homogeneous and heterogeneous environment. They are used on daily basis, otherwise it would not be possible to communicate. Below, I would like to demonstrate an example of an interaction dealing with unexpected context parameters in the Japanese communication environment.

The example text in Japanese is placed in APPENDIX 1. Its English translation can be found in APPENDIX 2. The text originates from Hatopoppo Nursery located in Sapporo, Japan. It is worth noting that the

text is neither very sophisticated nor official – it is a message from the nursery staff to the parents, which could probably be questioned by many language purists on account of its form and content. I selected the text and attached it below in its original form, since it is my conviction that linguists should be able to describe and cope with any instance of communication. The example text constitutes a record of a very interesting instance of communication, in which an unexpected event – a traffic accident of the nursery bus – is dealt with by providing the communication partners with maximum amount of information and by mapping the unpredictable infelicity into a predictable flow of human relations. I will try to demonstrate how the above is achieved with the use of activity patterns shared and internalized in the Japanese communication environment.

Known Schemes in the Japanese Environment

The most widely spread scheme underlying most interactions carried in the Japanese environment is Vertical Dependence (VD). In almost any act of communication it is possible to describe the roles of vertical Senior (S), occupying a higher vertical rank and of Junior (J), who occupies a lower vertical rank. S is usually equipped with more procedure rights, while J is obliged to be more active in monitoring procedure parameters and bear more responsibility for the result of the exchange. This is also demonstrated in the choice of vertical honorific forms, but within the description of a procedure such choice should be treated rather as emerging from procedural parameters and secondary, quite differently from the well-known scheme of power and solidarity, as discussed by Brown and Gilman (1960), for whom the honorific forms of certain lexical elements seem to be of primary interest.

Nursery Environment

In terms of genres of exchange the conventional scheme of exchange in a nursery constitutes a Commercial Exchange (CE) (Jabłoński 2006). According to the basic pattern of roles in CE, Provider of Service (PoS) delivers goods and the Customer (C) gets goods in exchange for a payment. In the VD scheme in the Japanese communication environment the PoS usually acts as J and the C acts as S.

The members of nursery personnel act as PoS and parents (as well as their children) act as C. As can be seen, in the nursery context the exchange of goods and payments is rather of an indirect character. Children are cared for and their well-being is regarded most important, but at the same time

they do not act as immediate partners in the scheme of communication. Parents must be consulted in all matters related to their children.

The nursery functions as a fixed and predictable environment. The personnel and parents co-operate in order to achieve a common goal. Any infelicity constituting an obstacle to this – in Japanese often referred to as *meiwaku* 迷惑 – ‘a trouble’ or ‘an inconvenience’ – should be prevented or, once it happens, resolved with all possible care by the concerned parties. The recognition of *meiwaku* applies both to one’s own inconvenience and to the inconvenience constituting an obstacle for a partner to proceed with the exchange. Such attitude may be referred to in Japanese as *omoiyari* 思いやり, for which ‘consideration’ constitutes only a very rough English equivalent.

An Infelicity and a Remedy

The bus accident is a shift from predictable to unpredictable. It is important to understand that in the Japanese scheme of *omoiyari* infelicities affect both parties. An accident is least desired, since it brings into question the very coherency of the procedure. There is a danger that the procedure is not recognized as a procedure anymore. There is a threat that the other party refuses to communicate – or even a suspicion that it has ceased to communicate in a predictable manner already, unless the procedure flow is not restored to predictable.

There must be remedies for unpredictable situations. In the Japanese environment, a procedure labeled below as “apology” may be given as an example of such procedural remedy. It should be noted, however, that this label is quite misleading, since both the term and the very procedure of apology are interpreted and used differently in English environment. Below I will not focus on the issue whether and to what extent the English apology is close to its Japanese counterpart, or whether these entities should be viewed as counterparts as such. The analysis of the terminology for naming procedural units is outside the scope of this paper.

The procedure of apology used in the example text has three main objectives:

1. To maintain predictable flow of the situation.
2. To reconfirm procedure roles.
3. To avoid destructive procedures.

The 3. is particularly important. There are environments where other procedures are used instead of apologies. In such environments, it is fairly predictable that in the case of an accident similar to the one described in the example text, C will seek help from the third party, for instance, a

lawyer, to file a suit for damages against PoS. In the Japanese environment such situation is not anticipated and avoided.

One more important remark to be made here. It is not my intention to argue that the Japanese way of mapping unpredictable situations into predictable is more sophisticated or better than other techniques. The goal of this paper is to describe the schemes of managing infelicities in the Japanese communication environment in order to demonstrate how different linguistic and non-linguistic schemes of behavior may function as shared activity patterns.

The apology procedure in the example text will be described on three levels: the semantic level, the grammar level and the sub-procedure level.

Semantics of Apology

On the level of semantics it is possible to observe many instances of overt mentioning of units referring to the *meiwaku* caused by the bus accident. The most overt mention of the accident appears in the very beginning of the special message as: *en no shinyō o sokoneru yō na jūdai na jiko* 園の信用を損ねるような**重大な事故** ‘a serious accident that could undermine [your] trust in [our] nursery.’ Among other, such units appearing throughout the text can be: the already mentioned *meiwaku* 迷惑 ‘trouble, nuisance’ as well as *shinpai* 心配 ‘anxiety’, *owabi* お詫び ‘apology’, *hansei* 反省 ‘reconsideration’ and *taisaku* 対策 ‘preventive measures.’

It is good to note that the *meiwaku* elements are not quoted as neutral and not related to the PoS activity. On the contrary, every effort is made in order to emphasize the role of PoS, who is the originator of the message, in causing the *meiwaku* to C. This is especially evident in the use of the transitive verb *okosu* おこす in the phrase *jūdai na jiko o okoshite shimai* 重大な事故をおこしてしまい, which is only roughly rendered by English ‘we had an accident,’ which could be interpreted both as an inclusive and exclusive, while the Japanese *okosu* clearly indicates the responsibility of PoS and their active role in causing the accident. Also, when the injuries are mentioned, it is clearly the PoS who bears responsibility for them, as in the phrase *kega o owasete shimatta* 怪我を負わせてしまった ‘[having] inflicted injuries’, where the act of inflicting injuries is marked by the causative form of verb *ou* 負う ‘suffer [a wound]’ which becomes *owaseru* 負わせる ‘inflict,’

In both cases above the undesirable character of actions is emphasized also by the use of auxiliary verb *shimau* しまう, which is used in negative contexts.

There is no single mention of excuse for the PoS for the infelicity. The only phrases not related to the nature of the infelicity and not constituting the overt apology are *nidoto onaji koto ga okoranai yō ni* 二度と同じことが起こらないように and *onaji koto o kurikaesanai tame* 同じことを繰り返さないため which refer to the idea of ‘preventing the same thing from happening again.’ They appear respectively, in the initial and final part of the message.

Grammar of Apology

In the passage devoted to the grammar of apology I would like to concentrate mainly on the markers of honorific modification in the example text. In the HM theory (Jabłoński 2004) such markers are described as protocol markers. The markers appearing in the text can be referred to as the vertical and horizontal protocol modification.

The vertical modification is based on the scheme of VD mentioned above. It is typical for all Japanese texts in which the VD scheme requires emphasis. Throughout the text, the actions of PoS are interpreted and marked as humble, which is visible in such constructions as *dōzo yoroshiku onegai itashimasu* どうぞよろしくおねがいたします and *owabi mōshiagemasu* お詫び申し上げます, which can be rendered, respectively, into the English ‘we kindly ask your cooperation’ and ‘we would like to deeply apologize’ respectively.

On the other hand, the actions of C are interpreted and marked as exalted: *minasama mo shinpai sarete iru to omoimasu* 皆様も心配されていると思います ‘we are aware of your anxiety.’

The vertical distance markers are combined with benefactive markers, based on the scheme of favour exchange. C’s actions are consequently interpreted and marked as favours done to PoS, as in *zehi gosanka kudasai* ぜひご参加ください ‘we await your participation’ and actions of PoS performed for C as humble acts accomplished with the leave of C, as in *hōkoku o sasete itadakimasu* 報告をさせていただきます ‘we would like to inform you’.

It is necessary to point out that the above schemes of grammatical marking of honorific oppositions are by no means particular to the Japanese procedure of apology. They are primarily related to marking the procedural roles of PoS and C in the CE procedure and as such are necessary to reassure the partner that the CE procedure is not interrupted due to the infelicity.

Another important technique of protocol modification is a horizontal modification. The main feature of this kind of modification is often described by grammars of Japanese as the opposition between the plain (*-u* and *da*) and polite (*-(i)mas-* and *desu*) forms of verbs and copula. It is interesting to note that in the text below this distinction has nothing in common with politeness. The “polite” forms are used in the initial and final part of the message and in the beginning of part 3. in order to mark the PoS comments. “Plain” forms appear in the paragraphs with a purely informative content, which proves that the phatic distinction between this kind of content and the remarks from the PoS is more important than expressing “politeness” and can be regarded as a kind of sub-procedure switching.

Sub-procedures of Apology – Hidden Messages

One more reason why the label „apology” does not quite suit the procedure in the example text, is that the text can be divided into many sub-procedures carrying different hidden messages towards the addressee. Perhaps the most important message emerging from the text is “we are on the same boat” which may be opposed to the “who is to blame” message in some other conceivable communication environments.

The core element of apology is the overt expression of apology appearing in the initial part of the message and repeated in its final part. The hidden message conveyed in these parts of text could be interpreted as “PoS bears the responsibility for the infelicity”. The sole mention of apology, however, would not be enough to suffice the requirements of a text of special message with the purpose to map the unpredictable events into predictable actions.

An essential part of the example text is devoted to thorough description of the accident and of what followed it. For a reader belonging to a communication environment different than Japanese it may be amazing to find out how detailed and extensive information on the event is provided. In the Japanese communication environment such information serves to reassure the C that “PoS is a reliable source of information”. This is very important for restoring the predictable flow of events.

It should be noted that also parent’s questions to the nursery personnel have been listed in the text. The hidden message here is: “PoS knows what C feels and is open for C’s suggestions”.

The declaration of reconsideration and planning of the preventive steps is an overt declaration that “we are willing to co-operate and can make things better”.

Accordingly, it is important to pay attention to some technical aspects of the example text. The title *Rinjiendayori* 臨時えんだより rendered in English as ‘Special Message’ indicates overtly: „This is important”. The same is the function of phatic oppositions marked by horizontal HM modification mentioned in the previous section. The reader of the text knows at a glance that “these are the facts” and “this is the apology from the PoS”.

A deeper analysis of the text contents can reveal that many of its elements are understood tacitly which is typical for an internal use of an emergency message not intended to be used by outsiders. Neither the names of sender and addressee nor the names of persons involved are mentioned overtly. The contents of the message may be clearly understood only by insiders who co-operate and know each other well. This is another hidden message for the reader.

Another important feature of the message that cannot be rendered in any translation is that it was available at the nursery entrance as a handout for all parents and persons visiting the nursery (last but not least, this was also how the author of this text got the original). The hidden message of this presently invisible context parameter is extremely important: “the PoS has nothing to hide from anybody”.

Conclusions

The example text is a record of a procedure of apology in Japanese communication environment. As it was demonstrated above, procedures are required in any communication environment, although they do not necessarily have to be similar. It should be emphasized here once again that the very label of the procedure as apology may be considered misleading, for the scope of application of apology procedure in other environments differs considerably.

The distinctive feature of apology procedure in this environment is that it is often used as an act of restoring a predictable action flow after an infelicity. It is not unthinkable that the apology is used for the same purpose in the environment other than Japanese. The question is whether it is recognized by competent speakers of an environment as the same procedure. The non-Japanese notions of apology often stress such factors as “sense of guilt” and “showing remorse”. Łysakowski (2006) uses these notions to describe the use of apology in Polish, which is a native language of this author. In Polish, it would seem, an apology is made when someone gets hurt. The one who apologizes is expected to act sincerely, while on the other hand, it is possible to excuse oneself while apologizing. Whatever the excuse, the

apologizing side overtly admits its blame, while the other side is considered “not guilty”. As could be seen above, this approach is considerably different from the Japanese.

In Japanese environment one apologizes after having recognized an infelicity or even a possibility of its emergence. Infelicities are perceived as mutual problems that have to be coped with, the sooner, the better. An apology is an act of *omoiyari* and it takes *omoiyari* also from the apologized part in order to be performed properly. Blaming someone is a different procedure, which tends to be avoided. This explains why it is possible to see numerous apologies for product faults in Japanese newspapers. Such apologies function as a tool of communication with one’s vertical partner in any instance when there emerges a doubt whether a fixed procedure is still perceived as a procedure. For a Pole to place an apology in a newspaper would be unimaginable, and it is unlikely for someone to do so without an order from the court. This is also fairly intelligible in the Polish environment: no one likes to be guilty.

Different functions of apologies in different environments constitute serious translation and interpretation issues. In the theory of translation, the target text should be transparent to the “final user”, which is hard to achieve when a procedure valid in the source environment is invalid in the target environment. The translator or interpreter has to act as a cultural expert in such situations.

Different procedures are preceded and followed by different events in different environments. Sometimes it is not enough to provide additional comments and the only way for the translator/interpreter to choose is to omit certain passages of text. In a case of an apology in a newspaper, it may be extremely difficult, since in most cases the whole text should be omitted as bringing about different communicational events, and hence would be unintelligible in a non-Japanese environment.

Procedure awareness is an important factor of communicational competence. In this sense, learning a foreign code also constitutes an instance of translation/interpreting activity. It is not possible to render many procedures in a classroom setting, and therefore they tend to be neglected in the curriculum of foreign language study. The learners have to rely on their own intuition and experience in a foreign environment. It is not enough to classify the Japanese as “polite” because “they apologize,” to understand the function of apology procedure in the Japanese environment. It is not enough to be “polite” in one’s own belief in order to communicate. At the same time, as demonstrated above, even relatively simple examples of texts have to be rooted in a certain procedure setting.

Co-operation on the level of procedure in the Japanese environment requires above all a high level of sensitivity to the procedure (in)coherence. Since I do not have at my disposal any scientific comparison tools, I to refrain from comparing the level of procedure coherence (in)sensitivity of the Japanese and the non-Japanese. In the Japanese environment, as I have tried to demonstrate, it is very important to define the vertical roles of partners and the desired procedure flow in order to control whether the procedure is smooth and predictable. Infelicities are perceived as unavoidable but there are conventional ways of dealing with them. Procedure restoration is an essential social skill and the apology procedure constitutes an important tool to achieve procedure coherency after it was violated by an infelicity.

APPENDIX 1 - Original Text in Japanese

臨時えんだより

2005年7月19日(火)

この度は、園の信用を損ねるような重大な事故をおこしてしまい、園児二人に軽傷を負わせ、一人は通院が必要な怪我になってしまいました。父母の皆様にはご迷惑と心配をおかけしたこと、大ぞう組の子どもたちには怪我を負わせてしまったこと、合宿の日程を変更せざるをえなかったことを深くお詫び申し上げます。二度とこのようなことが起こらないように、事故を反省し今後の対策を熟考しているところです。父母の皆様からも忌憚のない意見をいただき保育に活かしてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくおねがいたします。まずは、この書面をもちまして、事故の状況と年長合宿の後に持ちました説明会の報告をさせていただきます。

1. 事故の状況

発生状況

7月15日(金)合宿の一日目の日程である平和湖(西区平和)に向かう途中の北1条宮の沢通りでAM9:40ごろ園バス(園児12名保育士2名乗車)が車線変更後の前方不注意により、前の車に追突、その衝撃でその前2台も追突し3台の玉突き事故となりました。園バスに乗っていた子どもたちは、追突の衝撃で2名が負傷。1名はおでこをぶつけ、もう1名は前部の座席に顔面をぶつけ歯茎から出血してしまいました。他の10名は驚いた様子でいたものの無事でした。追突した車の方は始めの1台の後部の損傷がひどく、他2台にも損傷がありました。その時点で運転していた方に怪我はありませんでした。

2. その後の対応

- ①110番通報する。
- ②園に連絡し、年長の保護者に連絡を入れてもらい・事故にあったこと・合宿の1日目の日程変更をする事を伝えてもらう。
- ③歯茎から出血していた子をタクシーで“あらい歯科”につれていく。おでこをぶつけた子はシブで手当とする。
- ④保険会社に連絡する。
- ⑤警察が来て事情聴取や現場検証があり、しばらくその場にいたが、時間がかかり全員ではすぐに帰れそうもなかったので(園バスの子の状況確認があった)園長カーが先に帰り、子どもをおろしてから再び迎えに行く。園バスの子は園長カーとタクシーで園にもどる。
- ⑥大ぞう組の子は帰園後、昼食をとり午睡し、その後は合宿の日程を予定通り行う。
- ⑦警察や保険会社、法人の理事長や理事と事故後の処理を確認する。
- ⑧被害にあわれた方の状況を確認する。(4名が打撲や打ら身)
- ⑨合宿のお迎え時に事故の説明会を行う。(7月16日PM1:30より)

3. 説明会で出された質疑

説明会では園側より上記のことをまともでない状況でありましたが説明し、父母よりいくつかの質疑が出されましたので報告します。

- ① 今後直近に控えている園外保育は園バスで行うのか？どうするのか？
- ② 園バスがもどってきた場合事故をおこした運転手を使うのか？
- ③ はとポップの環境を考えると園外保育を多くやっているのはありがたい。事故はいつでも起こりうる。保育士が本来の仕事の他に運転もするというのはリスクが大きすぎると思う。今回の事故で始めの伝達と事故の状況がくい違っていた。
- ④ 保険会社への連絡が遅すぎて病院に伝わっていなかった。一考してほしい。

以上の質疑がありました。

4. 全体懇談会のお知らせ

説明会は急な日程で大ぞう組の保護者と他数名の参加で行われました。事故についてはTVニュースになったり、新聞の記事にもなりましたので、皆様も心配されていることと思います。それで事故の報告と今後の園外保育のあり方について全体懇談会を開催することにしました。今回の事故をしっかりと受け止め同じことを繰り返さないために反省し、多くの保護者からの意見を今後のはとポップの保育に活かしていきたいと思っております。日時、出欠等を張り出しておりますのでぜひご参加ください。

APPENDIX 2 - Original Text – English Translation

Special Message

July 19th, 2005 (Tue)

In recent days we had an accident that could undermine your confidence in our nursery. Unfortunately, two children were wounded and one of them had to receive a treatment in hospital. We would like to deeply apologize for the trouble and anxiety caused to all parents, for inflicting injuries to the children of the Big Elephant Group and for the inevitable changes in the schedule of the excursion. We are currently in the process of reconsidering this accident and thinking of preventive measures to be taken not to let an accident like this happen again. We would also like to receive frank opinions from all parents, which we will try to make use of for the improvement of our childcare system. We kindly ask for your cooperation regarding this matter. In this message, first of all, we would like to inform

you on details of the accident and of the explanatory meeting organized after the excursion of the oldest group of children.

1. Details of the Accident

On 15th of July (Fri), the first day of the excursion, at about 9:40 AM, the nursery bus (with 12 children and two teachers on board) heading for Heiwako (located in Heiwa, Nishiku) run into the car ahead at Kita 1-jō Miyanofukusawadōri, due to the carelessness of the driver who did not pay sufficient attention to the front of the bus after changing the lane. This resulted in a collision of three cars, including the first and second cars ahead. Two children who were on the bus suffered injuries in that collision. One was hit in the forehead and the other had his/her gum bleeding after hitting his/her face into the seat in front of him/her. Other children were shocked but safe. The back of the first car ahead was severely damaged, and the other car was damaged as well. None of the drivers was injured at the moment of the accident.

2. Measures Taken

- ① We made an emergency call to the police.
- ② We contacted the kindergarten asking them to get in touch with the parents of the oldest group children and to inform them about the accident, as well as about the change of the schedule for the first day of the excursion.
- ③ We accompanied the child with the gum bleeding in a taxi to the Arai Dental Clinic. The child who hit his/her forehead was applied a compress.
- ④ We contacted the insurance company.
- ⑤ The police came, asked us about the accident and investigated the site of the accident. We stayed there for a certain amount of time, but since it took quite long and it did not look like all of us could leave quickly (we made sure of the condition of the children on the bus), some children were taken back by the director's car first, after which the car came back to the accident site. The rest of the children from the bus returned to the nursery in the director's car or by taxis.
- ⑥ Having returned to the nursery, the children from the Big Elephant Group had lunch and took a nap. After that, everything was performed according to the excursion schedule.
- ⑦ We reconfirmed the measures to be taken after the accident with the police, the insurance company, the director and the executive director of the nursery.
- ⑧ We checked the condition of the persons injured (four persons were

bruised).

- ⑨ We organized an explanatory meeting about the accident soon after returning from the excursion (July 16th, from 1:30 PM).

3. Questions Raised at the Explanatory Meeting

At the meeting, we explained the situation the best we could at that moment, and received following questions from the parents.

- ① Are you going to use the nursery bus for the other excursions scheduled in the near future?
- ② Is the same driver, who caused the accident, going to drive the nursery bus after the bus is returned [from the repair]?
- ③ We appreciate that the excursions outside of the kindergarten are organized, especially when one thinks about the Hatopoppo environment. Accidents may always happen, but we think that the risk is too big if the teachers also have to drive, besides doing their original job. The content of the initial notification from the nursery about the accident was different than the actual state of affairs.
- ④ You should carefully consider the fact that the insurance company was contacted too late and thus the hospital was not notified on time.

4. Notification on the Gathering

The explanatory meeting was organized suddenly, and was attended by parents of children of the Big Elephant Group and other persons. The accident was reported by the TV and the newspapers, so we are aware of your anxiety. For that reason, we decided to organize a general meeting to report on the accident and to discuss how the excursions should be organized from now on. We recognize the seriousness of the situation and would like to reflect on this accident in order to prevent the same thing from happening again. We will also try to utilize the opinions of the parents in our future activities at Hatopoppo. We distributed a notification on the date and hour of the meeting, as well as a list of attendance. We await your participation.

References

- Austin, John Langshaw. 1962. *How to do Things With Words*. Harvard: Harvard University Press.
- Brown, R., Gilman, A. 1960. *The Pronouns of Power and Solidarity*. [in:] Sebeok, T. [ed.] *Style and Language*. MIT Press, Boston.
- Hymes, Dell. 1974. *Foundations In Sociolinguistics. An Ethnographic Approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Jabłoński, Arkadiusz. 2004. „Honorific Modification (HM). The Informative and the Non-informative Part of the Message.” *Silva Iaponicarum* 1, www.silvajp.amu.edu.pl.
- Jabłoński, Arkadiusz. 2006. „Procedure Honorific Modification Layer and the Japanese Communication Environment.”, *Lingua ac Communitas* 16.
- Mandler, Jean Matter. 1984. *Stories, Scripts and Scenes: Aspects of Schema Theory*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Łysakowski, Tomasz. 2006. „Psychologia przepraszenia” (the psychology of apology). [in:] Małgorzata Marcjanik [ed.] *Retoryka codzienności. Zwyczaje językowe współczesnych Polaków* (daily life rhetoric. Linguistic customs of contemporary Poles). Warszawa: Wydawnictwo Trio.
- Milewski, Tadeusz. 2004⁷. *Językoznawstwo* (linguistics). Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN.
- Schank, Roger C., Robert P. Abelson. 1977. *Scripts, Plans, Goals and Understanding*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Yngve, Victor H. 1975. *Human Linguistics and Face-to-Face Interaction*. [in:] Adam Kendon, Richard M. Harris, Mary R. Key. [eds.] *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*. The Hague, Paris: Mouton Publishers.
- Wierzbicka, Anna. 1991. “Speech acts and speech genres across languages and cultures” [in:] *Cross-cultural pragmatics. The semantics of human interaction*. Berlin-New York: Mouton de Gruyter.

Adam Bednarczyk

From *ezukunokaiōi* to *eawase*. On the event from the first year of Tenpuku held by Ex-Emperor Gohorikawa and Sōhekimon'in

The present paper focuses on an intriguing event named *ezukunokaiōi*. In a short story under the same title depicted in *Kokonchomonjū*, we learn about exchanging of pictures between Gohorikawa's and Sōhekimon'in's teams. This paintings' exchange began as a result of a *kaiōi* (lit. 'covering shells', a game, where players competing to match shell-pairs), namely the lost team should have to prepare *makewaza* (a forfeit for losing a game). In case of *ezukunokaiōi*, as Ise Sadatake reads, the forfeit was a submission of painting. If we consider this event only from the *Kokonchomonjū*'s perspective, we might have an illusion that it was a single time play only. According to accounts in *Meigetsuki* (Records of the Clear Moon) by Fujiwara Teika, to the correspondence of Gohorikawa's half-brother, Sonshō prince-abbot with the Ex-Emperor's court included in *Shinkyōji monjo* (Documents of Shinkyō Temple), or to *Minkeiki*, the records of Fujiwara Tsunemitsu, it is clear, however, that the event organized by Gohorikawa and Sōhekimon'in, was stretched over few months. A production, commissioning, or searching for new paintings, is quite explicitly described in mentioned sources. Such active competition between both sides for presenting the most remarkable works became in result an *eawase* (paintings competition). Although discussed event differs in its duration from the style of the formerly given *eawase*, it stands for an important illustration of the cultural and pastime life of the aristocracy on the threshold of a new political and social reality.

Arkadiusz Jabłoński

**How Procedures Work –
An Example from Japanese**

Linguistics serves to achieve a scientific understanding of how people communicate. Procedures function as basic units of communication, including not only the exchange of messages, but also monitoring the environment parameters and interpreting/modifying communication behavior of the situation participants. An example from Japanese

communication environment demonstrates how the procedure of apology is used to solve unpredictable situations in terms of predictable procedural patterns of behavior.

アダム・ベドゥナルチク

「絵づくの貝おほひ」から絵合へ —天福元年頃、後堀河院と藻壁門院主催の催し物をめぐって—

本稿では、「絵づくの貝おほひ」に焦点を当てて論じる。この説話は『古今著聞集』に描かれているが、それによれば、後堀河院の方と藻壁門院の方の間で絵画の交換が行なわれた。絵画の交換は、貝覆いの結果として開始された。すなわち、伊勢貞丈によると、絵画の陳列は、ここでは遊芸の負け業として用いられた。なお、『古今著聞集』だけに依拠すると、一度限りの催事であったと誤解されかねない。しかし、藤原定家の『明月記』、後堀河院の同母兄である尊性法親王による『真経寺文書』や藤原経光著の『民経記』に従えば、後堀河院と藻壁門院主催の催し物は、数ヶ月間にわたって行われていたことが明らかである。この催しに関する絵画の制作・注文・収集などは、上記文献中に、詳細に記録されている。そこからは、このうえなく豪華な作品の陳列をめざす競争が、実際は絵合として行われていたことがわかる。天福元年の催し物は、以前に行なわれた絵合とは異なるものだったが、新しい政治・社会的現実の最尖端にいた貴族の文化と娯楽の一端をうかがわせる重要な例である。

アルカディウシュ・ヤブオニスキ

プロシージャーはどのように働くか —日本語の例

言語学研究の目標は、人間のコミュニケーション活動の科学的理解に貢献することである。プロシージャーが関わるのは、メッセージ交換に限られない。コミュニケーション環境のパラメータ監視、場面参加者の行動の解釈・変更に関するコミュニケーション単位である。日本語コミュニケーションを実例に、予測不可能なコミュニケーション場面を予測可能な謝罪プロシージャー行動パターンで説明することが、小稿のねらいである。

AUTORZY / CONTRIBUTORS / 投稿者

Adam Bednarczyk

M.A. at the Department of Japanese and Chinese Studies, Jagiellonian University, Cracow in 2006. M.A. thesis: *Between Reality and Dream – about Literary Fiction and World of Dreams in “Sarashina Nikki”*. Currently a Ph.D. candidate at Osaka University. Research interest: classical Japanese literature, Japanese court culture of the Heian Period and its perception in following centuries, Japanese ludic culture.

Arkadiusz Jabłoński

Associate professor at the Adam Mickiewicz University Chair of Oriental Studies, Department of Japanese Studies, specializing in general and Japanese linguistics. Ph. D. in linguistics at the Oriental Institute, Warsaw University with a thesis on semiotics and pragmatics of contemporary Japanese honorifics (2001). Currently his interests focus on coherent and code independent model of honorific modification (HM), issues of translation, interpretation and intercultural communication.

アダム・ベドゥナルチク

2006年、クラクフのヤギェロン大学日本中国学科にて修士号取得。
修士論文：「現実と夢の間 — 『更級日記』に於ける文学的虚構と夢の世界について」。現在、大阪大学博士後期課程在学。専門分野：日本古典文学、日本平安朝文化と後世におけるその受容、日本の遊戯文化。

アルカディウシュ・ヤブオニスキ

日本語言語学・一般言語学専攻。アダム・ミツキエヴィッチ大学東洋学研究科日本学科准教授。

2001年、現代日本語における敬語表現の記号論・語用論に関する博士論文をワルシャワ大学新文献学部東洋学科に提出。現在の主要な研究主題は、情報伝達過程のあらゆる階層に繋がりを持ち、かつあらゆる言語に適応可能な待遇情報(HM)モデルの作成、翻訳・通訳・異文化コミュニケーションに関わる諸問題。

PRACE NADSYŁANE / FOR CONTRIBUTORS / 投稿

1. Przyjmujemy niepublikowane gdzie indziej dokumenty w formacie MS Word, w objętości do ok. 40 000 znaków z włączeniem spacji. Wymagany język dokumentów do publikacji to angielski lub japoński. W innych językach przyjmowane są wyłącznie tłumaczenia japońskich tekstów.

2. Prosimy dostosować transkrypcję wyrazów japońskich do standardu Hepburna lub Kunrei, przy użyciu dostępnych czcionek. Transkrypcja wyrazów niejapońskich powinna być zgodna ze standardem *de facto* dla danego języka. Redakcja może zasugerować zmianę systemu transkrypcji tekstu.

3. Przypisy powinny znajdować się na dole strony.

4. Do tekstu głównego powinno zostać załączone krótkie streszczenie oraz informacja o autorze w języku angielskim i japońskim.

5. Komitet redakcyjny decyduje o dopuszczeniu tekstu do publikacji i powiadamia o tym fakcie autora.

6. Nadesłanie tekstu oznacza zgodę na jego publikację drukiem i na wprowadzenie do tekstu niezbędnych zmian edytorskich.

7. Teksty prosimy nadsyłać jednocześnie pocztą elektroniczną (wersja elektroniczna) oraz pocztą klasyczną (w formie drukowanej) na następujące adresy:

1. We accept documents unpublished elsewhere in MS Word format, not longer than 40 000 characters including spaces.

Documents should be in English or Japanese. Only translations from Japanese may be accepted in other languages.

2. Use available fonts to adjust the romanization of to the Hepburn or Kunrei standard. Words other than Japanese should be romanized according to the *de facto* standard for a given language. We may recommend the change of romanization system.

3. Footnotes should be included on the bottom of the page.

4. Main text should come with short summary and information on the contributor in English and Japanese.

5. The editorial board qualifies a text for publication and notifies the author of this fact.

6. It is understood that by submitting the text the contributors give their consent to its publication in print and to making necessary editorial changes.

7. We await both your e-mail (computer file) and snail mail (printed version) contributions at:

1. MS Word を用いて書かれた 4 万字以内の未刊行の文章を受領する。用いられるべき言語は英語または日本語である。ただし、日本語テキストからの翻訳については、他言語の文章も受領される。

2. 日本語語彙のローマ字表記は、ヘボン式または訓令式とし標準フォントを使用すること。日本語以外の語彙のローマ字表記は、各言語の標準に従う。編集委員会は、ローマ字表記規則の変更を求める場合もある。

3. 注釈はページ下に載せる。

4. 本文に要約と著者紹介を英語と日本語で付記すること。

5. 編集委員会は、投稿原稿の掲載の可否を決定し、その旨投稿者に通知する。

6. 論文は、投稿された段階で、委員会がそれを公刊し、編集上不可避の変更を行うことを許可したものと見なされる。

7. 原稿は、電子メール（電子文書版）と郵便（プリントアウト版）の双方で、下記に送付すること。

Silva Iaponicarum
Uniwersytet im. Adama Mickiewicza
Instytut Orientalistyczny, Zakład Japonistyki
ul. 28 Czerwca 1956 nr 198
61-485 Poznań, Poland
E-mail: silvajp@amu.edu.pl